



立教大学 平和・コミュニティ研究機構
Rikkyo Institute for Peace and Community Studies

NEWSLETTER

No.29 2021年12月31日 発行

公開講演会報告

韓国と日本をつなぐ仕事6

高等学校における韓国語教育のあゆみと展望

近年、文化面を中心として日本での韓国に対する関心が広がっている。本学でも朝鮮語選択者は急増し、韓国ドラマを字幕なしで見たいとか、ダンスをし、歌を歌ってみたいなどの声を聞くことが増え、時代の変化を思わせる。

この間、立教大学平和・コミュニティ研究機構主催で毎年継続してきた(2020年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催を見送り)「韓国と日本をつなぐ仕事」シリーズの第6弾として、2021年6月17日に「高等学校における韓国語教育のあゆみと展望」と題したオンライン公開講演会を行なった。大学にとどまらず高等学校でも韓国語教育の取り組みは進んでいる。日本の高等学校で韓国・朝鮮系の学校を除けば、唯一韓国語コースを設置し教育に取り組んできた関東国際高校で現在副校長を務めていらっしゃる黒澤眞爾先生をお招きし、

昨今語られることの多い高大連携を念頭に置きつつお話を伺った。

黒澤先生はまず、ご自分の韓国との関わりからお話くださった。大学で歴史を専攻した黒澤先生は韓国の伝統芸能に関心を持ち、まだ韓国に留学する人が少なかった1985年に韓国に留学、忠清南道の村の祭りなどの芸能を記録するフィールドワークを熱心に行ない、大学生たちと仮面劇などにも参加した。単に言葉を学ぶにとどまらず、文化を広く吸収して日本に戻った黒澤先生は、アジア文化会館で文化交流事業を担当しアジアの留学生たちと交流するとともに、縁あって埼玉の自由の森学園高校で韓国語を教えることになる。この経験をもとに黒澤先生は、日本で初めて高等学校で韓国語のコースを設ける関東国際高校で韓国語教育にたずさわることを依頼され、1997年頃から準備に着手、20

00年には同高校の教諭として着任された。

何しろ高校の教員免許もまだ取得しておらず、取得できる大学も限られている中、資格を取得する一方で、カリキュラムを作り上げ教材を決め、韓国に生徒たちを派遣できる学校を探すなど、韓国語教育の体系的基盤を作り上げる作業に黒澤先生はゼロから取り組まれた。その後、黒澤先生のご尽力が功を奏し、現在韓国語コースを選択する生徒は約40名、卒業までに8割は韓国語能力試験(TOPIK)3級に合格するレベルに達している(このレベルは立教大学で初年次に朝鮮語を選択して初めて学習し、週2回の授業を1年履修した学生では到達が難しい水準)。卒業生の進路も多様化し、本学を含む日本の大学に進学するほか、直接韓国の大学に進学する人も増えてきている。

関東国際高校では韓国語、中国語、ロシア語のほか、インドネシア語、ベトナム語、タイ語の6言語のコースが近隣語コースとして置かれており、この3言語のコースがあるのは同高校だけである。

今や、全国では1万人あまりの生徒

たちが学ぶ韓国語。黒澤先生が今取り組んでおられるのは、高校生が韓国語を学習して到達すべき目安を立て一層学習意欲を高めることができるように、高校生向けの共通テストを定着させることである。これまで2回の実施を経て、今後本格的に実施をめざす計画だという。当日は関東国際高校を卒業して韓国の大学に留学、卒業して韓国の企業で働くことになった卒業生からも経験談を簡単にお話いただいた。この日、偶然マスコミの方が参加してくださっていて、卒業生のお話は後日、朝日新聞の日曜版別刷り『EduA』に紹介された。当日は韓国語教育関係者、関東国際高校・立教大学卒業生など約80人の皆様が参加してくださった。

黒澤先生は、「もう年を取ってきたし経験を話せということなのでしょう」とおっしゃられたが、付き合いの長い私も整理してお話を伺って、大変勉強になった。日本社会のこうした流れがより定着して日韓の出会いが一層深められるように、大学教育もますます力を尽くしたいところである。

(本学兼任講師・平コミ運営委員 石坂浩一)

公開講演会報告

「鄭敬謨(チョンギョンモ)さんのあゆみと時代」

2021年10月6日、立教大学平和・コミュニティ研究機構主催で公開講演会「鄭敬謨(チョンギョンモ)さんのあゆみ

と時代」をオンラインで開催した。鄭敬謨さんは1924年7月にソウルで生まれ、

2021年2月16日に横浜市のご自宅で亡くなられた在日韓国人の統一運動家である。日本で本格的に韓国民主化のための論陣を張るようになった1970年代以降、その文筆と雄弁を通じて日本や在日コリアンの若者たちを、民主主義と人権の活動へと奮い立たせた人物である。また、鄭敬謨さんはその卓越した語学力を駆使して、たくさんの翻訳作業を行ない、日本社会の知見を広げてくれた。韓国の民主化運動に関連した文献から、文学、社会科学に至る韓国の声を翻訳し、米国の朝鮮現代史研究者ブルース・カミングスの大著『朝鮮戦争の起源』をはじめとしたすぐれた研究を日本語にされた。同時に、鄭敬謨さんはシアレヒム社を作り、韓国語や韓国文化を日本社会に伝えるうえでも大きな役割を果たされた。私たちはそこで、鄭先生の見事な歌唱力にも接することができた。

何より大きなことは、朝鮮民族の和解のために 文益煥(ムンイクファン)牧師とともに1989年に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)を訪問した事実をあげなくてはならない。この大きな仕事が、統一運動の歴史に1ページを刻むことになったが、同時に鄭敬謨さんが亡命者として日本で生涯を終えられる原因ともなった。鄭敬謨さんは亡くなるまで帰国することが許されなかった。文牧師や鄭さんの北朝鮮訪問は、やがて2000年に南北首脳会談が行なわれる新

しい時代へとつながっていくのだが、89年当時は時期尚早などの声もあり、大きな波紋を呼んだ。



(林哲先生)

公開講演会では津田塾大学名誉教授の林哲先生から「亡命運動家鄭敬謨先生の生涯と時代」と題して講演をいただいた。鄭敬謨さんは日本の植民地支配の時代に生を享け、独立後は米軍に関わる仕事をする中で、朝鮮半島に関わる米国の役割に疑問を持ち、1970年代に日本において民主化を目指し健筆をふるうようになった。そして、朝鮮半島の解放後の政局の中でイデオロギーを超える道を目指そうとして暗殺された民族運動家呂運亨(ヨウニョン)のあゆみに注目し、日本において追悼事業も行なった。林哲先生は、鄭敬謨さんが呂運亨を取り上げた意義、時代的背景を考察し、そのことが南北統一運動への実践的参加につながっていったことを述べられた。

講演後、鄭敬謨さんと関わりのあった方々から、鄭さんとの思い出についてお話しいただいた。鄭敬謨さんのお仕事については1回の講演でとても語

りつくせるものではないが、この日の講演でその一端はうかがい知ることができたのではないかと思う。最後にご遺族で長男の鄭剛憲(チョンガンホン)さんからご挨拶をいただいた。オンライン

ではあるが、約160人の皆さんが参加してくださった。

(本学兼任講師・平コミ運営委員 石坂 浩一)

全学共通カリキュラム 総合教育科目報告

〈アジア地域での平和構築〉

「尹東柱(ユン・ドンジュ)とその時代」「尹東柱とその記憶」を担当して

2020年度より、それまで担当してきた「戦争・植民地・冷戦・戦後日本のアジア外交」を軸にした平コミ「アジア地域」アジアと日本の関係史科目を、前期「尹東柱とその時代」後期「尹東柱とその記憶」に改め、二年目となりました。

尹東柱は1917年かつて間島と呼ばれた中朝接境地域の明東という小さな村で三男一女きょうだいの長男として誕生しました。明東は19世紀末から20世紀はじめにかけて朝鮮半島北部から移住した人々が開拓した地で、現在は中国吉林省延辺朝鮮族自治州の一部です。

尹東柱は当地の民族系の明東学校、明東近郊龍井にあった民族系の恩真中学校(1932年入学)、平壤の崇実中学校(1935年編入)、当時京城と呼ばれていたソウルの延禧専門学校(1938年入学、延世大学校の前身)を経て、戦時下で延禧専門学校繰り上げ卒業後1942年4月立教大学文学部に入学(12月19日退学)、同年10月には

同志社大学文学部に入学し、1943年7月帰省直前に京都帝大学生だった同郷で同い年のいとこ宋夢奎(ソン・モンギョ)とともに特高警察に逮捕され、治安維持法5条で禁錮二年の判決を受け福岡刑務所で1945年2月に獄死しました。中学入学の頃から詩の創作を始め、生前は無名でしたが植民地解放後、かつての友人らの支援と尽力により遺稿集が出版されたことでその名が知られるようになり、現在まで20世紀の朝鮮半島を代表する詩人として広く親しまれています。

尹東柱は明東学校以来、学校教育のほとんどをキリスト教系の学校で学びました。例外は中学入学前一時籍を置いた大拉子の中国人小学校と、神社参拝拒否で崇実中学校が閉校となり上級学校進学のために五年制中学を卒業する必要からやむなく編入した龍井の光明中学校(日系)だけでした。これには彼が誕生した頃の間島の朝鮮人が直面していた不安定かつ複雑きわまり

ない国際情勢のもとで、キリスト教が一種の「政治的避難所」として機能していたことが少なからず関係していたと考えられます。日清戦争後の三国干渉が一種「敵の敵は味方」としてのキリスト教諸国を印象づけ、義和団事件の際、列強の圧力により間島の朝鮮人天主教(カトリック)関係者らの被害も清国の賠償対象となったことなどが、人々にとって信頼できる「保護者」「避難所」と映ったキリスト教が間島の朝鮮人社会に急速に普及するきっかけになったと推察されます。

立教大学とのゆかりですが、尹東柱自身日本留学の第一志望は京都帝大で、いとこの宋夢奎が合格を果たしながら尹東柱の入学はかなわず、必ずしも望んだ進学でなかったのかも知れません。尹東柱は立大進学時に知人らに東北帝大への編入について探っていて、東北帝大ではなく同志社に入学したことに実家は不満だったとも伝えられます。加えて尹東柱が入学したのは、キリスト教系学校が当局から睨まれ、立教大学への締め付けも厳しさを増していた時期にあたります。1942年夏、最後の帰省時に親類らと撮った写真で、いとこの宋夢奎が以前と変わらぬ長髪なのに対し、微笑んで写真に収まる尹東柱が坊主頭なのも、入学直後に軍事教練強化に伴う学生断髪令があったためでした。

上記のように尹東柱が立教大学に在

籍していた期間は約半年に過ぎず、京都時代も含め日本留学中に書かれた詩は、わかっている不完全なものを入れても五作品しか残っていません。こうした中、代表作のひとつである「たやすく書かれた詩」が立教在学中に書かれたことはひととき印象深いものを感じられます。長年謎だった、詩に登場する暗い六畳部屋は、後年「詩人尹東柱を記念する立教の会」によって、高田馬場駅近くの菊水館という下宿と判明します。きっかけは尹東柱と同郷で一年後輩の文益煥(ムン・イクファン、牧師・詩人・神学者で民主化・統一運動活動家としても活躍)が1989年朝鮮半島分断後民間人として初めて北朝鮮を訪問した際、同行した韓国の著名な作家黄皙暎(ファン・ソギョン)と会談した朝鮮文学芸術総同盟委員長で立教大学出身の白仁俊(ペク・インジュン)が、尹東柱と下宿が一緒だったと証言したことからでした。白氏は延禧専門学校で尹東柱の一年後輩にあたり、同志社大学に移った尹東柱を京都に訪ねています。このことで白仁俊も一時拘留されますが、送検には至らず釈放されました。文益煥は北朝鮮から韓国に戻った後、国家保安法違反で逮捕され懲役10年を宣告されました(求刑は無期懲役、1993年釈放)。国家保安法は日本の治安維持法を事実上翻訳したもので、かつての韓国の強権体制を支え現在も存続しています。尹東柱とその周辺を

めぐる人物関係からは、朝鮮半島の近現代史の複雑さを垣間見る思いがします。

授業を通してあらためて感じたのは、一人の人物の生涯を重ねて俯瞰することにより、豊かなイメージを伴った歴史というものが実感できたことでした。受講生のリアクションペーパーでも同様の声は多く、個々の史実と全体のつながりや時代を包む空気がリアルに想起され、それがとても新鮮だったといった意見もありました。

残念でならないのは、尹東柱の日本留学時代の詩や文章がほとんど残っていないことです。先の五作品はいずれも延禧専門学校時代の友人姜処重(カン・チョジュン)に宛てた手紙に同封され偶然存在が確認できたものに過ぎません。なお姜処重は解放後新聞記者として尹東柱の詩の新聞への掲載と詩集出版に尽力しましたが、朝鮮戦争勃発の前後にスパイ容疑で捕らえられ処刑されたと考えられてきました。遺族は後年これを否定していますが、消息は不明です。尹東柱亡き後も彼の存在を世に知らしめるために奮闘した人々についての再評価も待たれるところです。

尹東柱の逮捕後面会した親類知人らの証言では、取調中に朝鮮語で書かれた大量の詩やノートの翻訳をさせられる尹東柱の姿が語られています(宋友恵『尹東柱評伝』中の幼なじみ金禎

宇の回想では書類の高さは一尺以上だったとも)。個人的には尹東柱が京都滞在中、関西の朝鮮人コミュニティをどのように見ていたのかとても気になることです。京都でも、事実上関西で最初、日本で二番目の地下鉄である新京阪鉄道京都地下線(1931年開業、現在の阪急京都線の前身)や宇治川の水力発電事業関連工事などは朝鮮人労働者とかかわりの深いものです。尹東柱が植民地宗主国日本に来て何を見、何を思い感じたのかを知ることが出来れば、日本と朝鮮半島をめぐる近代史をかなり相対的に捉えることを可能としてくれたことでしょうか。また近代国民国家の枠組みの外で苦悶し続けた彼の生涯をかさねてアジアの近現代史を考えることは、歴史を考察しその意味を今日にいかす上での豊かな視座を提供してくれるのではないのでしょうか。史実の解明が進むことを願ってやみません。(立教大学全学共通カリキュラム運営センター兼任講師 高成鳳)

立教大学 平和・コミュニティ研究機構
NEWS LETTER No.29
(2021年12月31日 発行)
編集・発行：立教大学平和・コミュニティ研究機構
事務局：〒171-8501 東京都豊島区西池袋
3-34-1 池袋キャンパス内
電話：03-3985-4275
E-mail: peace@grp.rikkyo.ne.jp